

国立民族学博物館の収蔵品⑤

ミクロネシアの外洋航海カヌー



写真1 外洋を航海するカヌー。風を腕木側から受けてバランスをとって進める。(サタウル島、1978年)



写真2 オセアニア展示場のチェチェメニ号。パンダナスの葉で編んだ製帆をはじめ、すべて島産の材料で建造。

オセアニア展示場にはチェチェメニ号とよばれるカヌーが雄姿を見せている。このカヌーは、一九七五年に開催された沖縄国際海洋博覧会に三〇〇kmの大海原を乗り越えて参加した。チェチェメニは「忘れるな」を意味し、そのふるさととは、ミクロネシア連邦ヤップ州のサタウル島。南太平洋の小さなサンゴ礁島で五〇〇人が暮らす。島の人々は、この種のカヌーで無人島への漁労、他島にいる親戚訪問や島間での交易の航海に出かけている。

チェチェメニ号は、シングルアウトリガー・カヌー。船体の片側に腕木を張り出し、その先端に浮木(均衡材)を装着する。その反対側に小さいが客室を備えている。全長九m、高さ一・五m、三〇〇kmの航海には六人が乗り込む。島の木材を選びすぎり、一本の丸太から斧と手斧を道具に船大工が頭の中の設計図で建造する。まず、船底をくりぬき、同形の船首・船尾、数枚の舷側板と舷縁を削り出す。それらの部位を樹液で接合し、各部位にあけた穴をココヤシの繊維製のひも

で固縛する。穴には石灰セメントを詰めて防水。船体の長さにしてラストと腕木の寸法を決める。流線型の船体は、航海中の横流れを防ぐ。オセアニア海域から大型カヌーや伝統航海術が失われて久しい。しかし、ミクロネシアには、今でも外洋航海カヌーを操り一〇〇kmの航海を行う島がある。その一つがサタウル島。サタウル島の伝統航海術師は、十九世紀末に消滅したハワイやポリネシアの航海術を復活させてきた。一九七六年、米国建国二〇〇年記念にハワイの人々は、自らのルーツ、タヒチ島への里帰り航海を企画した。これは、外国からの移民や支配によってハワイ人が失ってしまった歴史、言葉、宗教、舞踊などの文化復興を願ってのことである。タヒチから移住したときの海の乗り物、ダブル・カヌーを復元した。その名はホクレア(喜びの星)号で、一九mの二つの船体を横木でつないだカヌーである。しかし、それを航海する航海者はハワイにもポリネシアにもいない。そこで、選ばれたのがサタウル島の航海術師、マウ・ピイルクである。

ピイルクは、一九七五年からハワイでポリネシア海域の星と波と風の知識を身につけた。そして、一九七六年五月にホクレア号のタヒチまで四〇〇kmの航海を成功させた。赤道を越えての三十三日間の航海で、タヒチ人から熱狂的な歓迎を受けた。この偉大な航海術師はハワイに数名の優れた弟子を育てた。その影響でオセアニアの国々は競って古代カヌーを復元し、航海を試みている。

二十世紀後半、太平洋地域ではカヌーの復元や航海術の復活など海洋文化復興のブームが起きた。この動きは、西欧人が太平洋に乗り出すはるか昔に、オセアニアの住人の祖先たちが大型カヌーで独自の航海術を駆使して未知の大洋を冒険し、島々を発見して定着したという「海洋民」としての威厳と誇りを表している。

(須藤健一)